



第159号 (2018)

〒733-0032広島市西区東観音8-10

ワールド・フрендシップ・センター

理事長: 山根美智子 館長: Dannie Otto & Barbara Shenk

TEL (082) 503-3191

FAX (082) 503-3179

E-Mail wfchiroshima@nifty.com

URL: <http://www.wfchiroshima.com>

WFCでのインターンとしての感想文

ミラベル・チェン2

WFC での経験

ケリー・パーカー4

アメリカPAX報告

三村 庸子18

アメリカPAX 2018

天野 達志20

「PAX アメリカツアーを終えて

—真のボランティア精神から伝えられる平和—

西井 美穂22

「アメリカPAXツアー」を振り返って

平和の基礎となるもの

田城 美怜23

WFCでのインターンとしての感想文

ミラベル・チェン

ビザ取得などのトラブルで一週間遅れとなりましたが、5月20日の陽のふりそそぐ午後、私はついに広島ワールド・フレンドシップ・センター到着し、そこでの素晴らしい6週間の体験が始まりました。

到着後2週間は、毎朝6時に日本語の短期集中コースをスカイプで受けなければなりませんでした。それはわずか8週間のコースですが、私はなお、かなりの日本語を学びました。つまり、それだけの価値があるものでした。

平和文化村での一週間は、本当に私のお気にいりの経験でした。現代の人々は、平和についていつも話しています。しかし、その人たちは本当に平和とは何かを知っているのでしょうか？ 平和文化村は、試行的コミュニティとして、平和の本当の意味は何かについて人々に考えさせてくれます。一晩の宿泊か、単に日中の仕事に参加するなど、いつも平和文化村にはゲストたちが行き来しています。この週は、ステイブ・リーパーさんや他のディレクターやスタッフが出かけ、私とメアリー・ポペオだけでしたが、私たちはなお素晴らしい時間を持ちました。そして私の昆虫や虫嫌いに対して、彼女の我慢と理解に本当に感謝しています！大きな都市、北京で育った私には、田舎に実際に住むというチャンスはほとんどありませんでした。それで、私にとっては目新しい、興味深いことがたくさんありました — 夏の夜、カエルの鳴き声と共に眠りにつく、鶏の声と日の出で目覚める、食事のための穀物を植え付け、その収穫物を食べる……すべてが私にとっては刺激的で、目新しいことでした。



私はWFCと修道大学に対して、それぞれの英語クラスに加わるという信じがたいほど素晴らしいチャンスを与えて下さいましたことに、とても感謝いたします。月曜日と木曜日の朝、英語クラスのお手伝いに、水曜日の午後は、イングリッシュ・ドリーマーズ・クラブに加わりました。学生たちは、ほとんど英文科の一年生でした。彼らを見ていると、私自身の5年前の高校のクラスを思い出させました……外国人としゃべるのがとてもはずかしい、クラスで質問をされるときはいつも緊張するという、英語が未熟な一少女を……そのことが、本当に私に学生さんたちを手助けするために全力を尽くそうという気持ちにさせました。さらに、彼らは、私がここに来て以来お目にかかった若者の最初のグループでした。WFCに来られるほとんどの方々は、40歳以上なので、私と同年代の人とお話できることはすばらしかったです。毎日往復するのに1時間半かかりましたが、その経験は、朝6時半に起きて時間をかけるだけの値打ちはあると私は思いました。すべての人たちは、本当にフレンドリーでした。完全な英語が話せなくても、ほんの少ししか交流ができなかった人達でさえも、彼らの笑顔は、素晴らしい歓迎の気持ちを私に感じさせました。私はいつも彼らがいかに習得が速く、各々のクラスでいかに熱心であるかということに驚いていました。もちろん一つの大きな理由は、ジム・ロナルド先生が、先生として、お友達として、いかにユーモアがあって献身的であったからということです。



4週目の週末、私は光栄にもWFCの理事会に加わるよう招待をいただきました。ほとんどの理事の方々は、英語を話されませんので、会合は、ほとんど日本語でなされ、バーブさんが私とダニーさん両方の通訳者でした。私もまた日本語で自己紹介をしましたが、皆様感心してくださったようでした。だから、日本語短期集中講座は、事実、本当に助けになっ

たと私は思います！ 会合は、効率よく運ばれ、ただ出席して、日本語の会合に耳を傾けるのは、素晴らしいことでした。

私は、きっといつか日本に戻ってくるでしょう！ WFCのために、私が親しくなったすべてのお友達のために、私のお気に入りの広島料理、お好み焼きのために、そして、もちろん、もっともっと多くのことのために！

翻訳者：清水美喜子

WFC での経験 ケリー・パーカー (2018年7月6日～8月12日)

雨のなかの到着

私は7月6日に広島に到着しましたが、その時は市内が豪雨の真ただ中でした。高速道路は通行止めで、バスも電車も走らず、空港ホテルは完全に満室でした。幸いにも清水美喜子さんと清水孝宣（よしのぶ）さんがこの大変な状況を手助けしてくれました。彼らは、私の為に空港ホテルに近いコテージを予約することができましたので、私は空港で一晩を過ごさなくて済みました。コテージは4人家族用のものなので、私一人には少し広すぎました。でも、私はそれを最大限に生かして、日本までの長旅の疲れをゆっくり癒しました。

翌日の朝、空港ホテルのロビーに移動しました。バスはなお動かず、WiFiと電話サービスも不通になってしまいました。ホテルへ食糧を運ぶトラックさえ到着せず、食べ物は何もありませんでした。結局、彼らは空港に私をシャトルバスで送り迎えしてくれたので、食べ物とWiFiにたどり着くことが出来ました。そこで、私は美喜子さんともっと連絡をとることが出来ました。どうやら、空港ホテルにもう一晩宿泊する必要があるということのようでした。幸いにも、このとき、私のための一部屋があいていました。時差ボケがあったので、その夜は5時近くにはもう眠くなりました。

翌朝、4時近くに目が覚め、やることもあまりなくてたくさんの時間がありました。

（WiFiも使えず、強い雨で散策もできなかったの。）結局、11時頃まで本を読んだり、いくつかの食品を得ることに美喜さんともう一度連絡を取るために空港行のシャトルバスに乗りました。そこにいる間に、空港が市内への別ルートを設けたということを見

ました！それは、東広島行のフリーバスで、そこから新幹線に乗り換えて、広島駅に行けるというものでした。美喜子さんは、このルートは大丈夫だと言ってくれました（一連のeメールで、日本語サインの写真を彼女に送り、私が乗ってもいいルートかどうかを返信してもらっていました）。それで、私は大急ぎで荷物を取りに行き、東広島行のバスに乗りました。それは、日本の農村地域を通り抜けるととても素晴らしいバス旅行で、昔の伝統的な家々と青々とした稲田を通過しました。



美喜子さんと孝（よし）さんと広島駅で会い、ワールド・フレンドシップ・センターに車で送ってもらいました。彼らに再び会えたこととWFCについて到着できたことは、とても素晴らしかったです。

懐かしい顔と新しい友達

WFCについてから、館長のバーブとダニー、そして彼らのお嬢さんであるソフィーも一緒にお会いしました。彼らは大歓迎してくれて、私はすぐにくつろぎを感じました。広島に7月6日に着いたといっても、多くの助けを借りてセンターにかりうじて着けた7月8日までは到着していなかったということです。7月8日は日曜日でした。その日は館長にとっては大切な日だということが分かりました。毎日曜日、彼らは“ドクター・マーティン”と呼ばれるテレビショーにはまって何シリーズも見ながら、夕食にポップコーンとリンゴを食べます。彼らは速やかに彼らの習慣の中に私を迎え入れてくれましたが、結果的にはそれは待ち望んでいたリラックスできる夕べなのでした。それ以降、私たちは食後、毎晩一回放映分を観ていました。

私がWFCに着いた翌日の7月9日、ピース・クワイアの行事が中止になったので、そのかわり、皆さんが昼食の為にWFCに来られました。これは、私にとっては3年前にお会いしたことがある素敵な人々や、初めての人々とお目にかかる素晴らしい機会でした。私は、山根美智子さんのルカという名の可愛い犬について知りました。そして、美喜子さんが皆さんに、私の名前を正しい発音に訂正してくれました。渡辺朝香さんが三村庸子さんのピアノ伴奏により、いくつかの歌を指導してくださいました。

ダニーの英語クラスのうち、あるクラスはジョン・ハーシーの本『ヒロシマ』を読んでいました。私もこの本を同じ時期に読んでいたので、数週間そのクラスに加わりました。クラスの人たちをもっと知るということは、本当に素晴らしかったです。

時たま、私はいくつかの他の英語クラスへも参加しました。一度、ダニーとバーブが大阪に行ったとき、ソフィーと私が英語クラスを指導しました。それは、木曜日クラス（自称、タンジェンシャルクラス）で、突然話題を変え始める会話をとても楽しみました。そして、私は原爆養護ホーム、むつみ園のために用意していた私の天文学クイズをするために、私の日本語のスピーチも練習しました。

パン屋さんと喫茶店

ソフィーは彼女の修士論文に専念していましたので、私達はしばしば喫茶店で勉強するために出掛けて行きました。このことは、私の日本語の会話とヒアリング力を幾分使える機会となりました。私達はまた、パン屋さんに行くのが好きで、度々訪れました。日本のパン屋さんは、アメリカのパン屋さんよりもっともっと心を躍らせます – カレーを詰めたパンを手に入れられる所が他にあるのでしょうか？！

むつみ園での天文学

バーブとダニーが大阪に行った日、美喜子さん、美智子さんそして庸子さんが私をむつみ園に、入居者慰問の為に連れて行ってくれました。私は、次のような天文学に関連したクイズを持って行きました。

1. 太陽に最も近いのはどの惑星でしょうか？
A). 水星 B). 金星 C). 木星
2. どちらが大きいでしょうか？
地球 又は 海王星？
地球 又は 月？
地球 又は 太陽？
3. 月の表面を歩いた最初の人是谁でしょうか？
A).バズ・オールトリン B).ニール・アームストロング C).トーマス・エジソン
4. 正しいか間違いか？：月は地球に潮の干満を引き起こす。
5. 航行に使われる北斗七星が指す星は、次の中のどの星でしょうか？
A). 太陽 B). 恒星（おうし座） C). 北極星

皆様は、特に月に対する質問が好きみたいでした。広島は、潮の干満で非常に著しく変わるので、多くの人達は月には非常に関心があり、かなり知識があるようです。

いつものように、しんちゃんはむつみ園では人気者でした。朝香さんがいくつかの歌を指導され、私はその月にお誕生日を迎えた皆様に、お花をプレゼントするのを手伝いました

長崎ネコとその他の長崎での出来事

7月21・22日と、美喜子さんと美智子さんと一緒に長崎に旅行しました。そこで、美智子さんの友達の一部、山川剛先生にお会いし、長崎を案内していただきました。私達は、長崎ちゃんぽんレストランに行き、そこの人々に人気のあるメニューを注文しました。それから、長崎原爆資料館と国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館に向かいました。長崎資料館と広島資料館を比べるのはとても興味がありました。そして勿論、それは非常に悲しくて心打たれる経験でもありました。その上、私達の英語ガイドだった、丸山佐知子さんは、とても親切でした。



左から 山川先生、美喜子さん、私、丸山さん、美智子さん

資料館の後、山川先生の奥様が、私達が泊まっていたカトリックセンターに来てくださいました。彼女は長崎の被爆者なので、彼女と彼女の家族の話をして下さいました。幸い、彼女の家族のほとんどは、爆心地からほんの1.4km離れたところに住んでいたにもかかわらず、生きて脱出することができました。部屋は彼女（その時は小さい子供）や彼女のお姉さん、お母さんの上に崩れ落ちましたが、幸いなことに、彼女の兄弟の一人と彼女のばあやさんが崩壊した建物から皆を掘り出すことができました。その弟は、一か月後に

放射線障害で亡くなりましたが、彼らの家族はその多くが生きていたので、まだ幸いだと考えられました。

長崎に滞在中に、私は長崎ネコについて知りました— 何だかしっぽが曲がっている野良ネコ。私達はその街で過ごした2日間に、多くのこんなネコを見かけました。カトリックセンターがそのネコたちの為に食物を置いたので、何匹か近くに集まってきたのでしょう。

長崎での2日目、私達は長崎平和公園で午前中を過ごしました。そこでは今平和公園となっているところに存在していた刑務所、大きな丘の下での避難トンネル、そして今公園に散在する記念碑などについて学びました。それらの多くは、放射線にさらされて殺され、苦しんだ人たちのために、他の国々から寄贈されました。幾つかは、水を求めて泣き叫んだ人達に水を捧げる平和の泉などでした。



平和公園ツアーの後、長崎市永井隆記念館を訪問しました。永井博士は、長崎では有名で、長崎での最初の名誉市民でもあります。彼は、自身がX線による被曝を認めた放射線科医でした。というのは、彼は、たとえX線フィルムが極めて乏しくなっていたにしても、彼の職務を辞めるのを拒否しました。ここから、彼はあと3年の命と予測される癌を発病しました。原爆が投下されたとき、彼はもっと放射能にさらされました。地域では、彼の病気がひどくなって歩けなくなった時、彼が滞在するための二畳の家を建てました。彼が小説を書いたのは、そこででした。彼の小説は、原爆投下の恐ろしさへの気づきを広めながら、平和への呼びかけでした。私達は、長崎にいる間に、永井博士の小さな家一如己堂、または“己の如く隣人を愛せよ”—を訪ねることが出来ました。長崎市永井隆記念館は、最初は原爆投下後の長崎の子供たちの為に、永井博士がつくった図書館でした。今日もなお図書館ですが、記念館の要素をもおまけに持ちあわせています。



如堂己

長崎市永井隆記念館に行った後、岡まさはる記念長崎平和資料館に歩いて行きました。この資料館は京都の平和ミュージアムのように小さかったです。

そこでは、第二次大戦中の日本の武力侵略行為の幾つかの事実が展示されています。それは、さらなる別の悲しい資料館でしたが、そのことについて多くを学んだのは初めてでしたので、私にとっては、驚くべきことでもありました。

広島へ帰る時、博多行きの途中で雷雨のため列車がストップし、2時間余り立ち往生させられました。けれども美智子さんと美喜子さんは、そんな困った状況にもかかわらず、とても快活にふるまっていましたが、そのうちWFCに帰ってきました。

オリアンダー・プロジェクト（そして他のWFCゲスト）

ワールド・フレンドシップ・センターが果たす一つの役割は、ゲストを宿泊させることです。大抵これらのゲストは、世界中の国々からです。毎朝、私達はゲストに朝食を提供します。それは彼らの話に耳を傾け、彼らの国々や文化についてより学べる素晴らしい時間でした。私がWFCにいた間に、フランス、ドイツ、オーストラリア、レユニオン島、イタリアー、北米、そしてベルギーからのゲストがありました。

オリアンダー・プロジェクトは、平和について学び、いかに彼らのカリキュラムにそれを取り入れるかを学びに広島に来た、中東と北米からの先生たちのグループでした。その内、8人がWFCに泊まり、その他はホテルに泊まりました。彼らがここにいる間は非常に忙しかったですが、それは極めて興味深いことでもありました。特に朝食は、すべての人が彼らの国について分かち合いましたので、素晴らしかったです。そして、サミア（モロッコから）は、試みようとするすべての人の為にいくつかの中東の料理を度々用意していました。



私は、サミアは他の人より腕がいいとわかりました。なぜならば、彼女は私とWFCインターン生の有田亮君に彼女を食料品店に連れて行ってほしいと頼みました。私たちは彼女が必要とするものすべてを見つけ出すのに奮闘しました—彼女は、私に何を見つけてほしいか英語で伝えていて、それから、私はそれを日本語のラベルが読めて、彼女が頼んだものを見つけられる亮に伝えました—しかし終に、私達は彼女が考えていた料理を作るために十分なものを見出しました。

オリアンダー・プロジェクトがワールド・フレンドシップ・センターで全部の部屋を使っていたので、私は約1週間、美喜子さんと孝さんの家に移りました。私は3年前、ワールド・フレンドシップ・センターの50周年記念の為に訪れた時、家族と一緒に彼らの家に滞在しました。だから、再び招待されたことは素晴らしかったです。彼らと肩を並べ、夕方には会えることも、とても良かったです。孝さんは、朝、私がWFCに朝食の準備を手伝いに行く前に、私のためのコーヒーを入れてくれ、美喜子さんには、他の料理のアドバイスと一緒に、寿司米をいかに正しく作るかを教わりました。彼らは、8月6日のための私のスピーチの練習をも手伝ってくれました、特に日本語の部分を。そして全体的に言えば、彼らと一諸により多くの時間を過ごすことは、非常に素晴らしかったです。



8月6日：忙しい日と沈む灯籠

8月6日は、ワールド・フレンドシップ・センターとのとても長い日でしたが、私はそのためにそこにおれた事が、非常にうれしいです。その日は、早朝に平和公園で行われた広島平和記念式典から始まりました。50,000人以上の参列者があったと聞いています。私達には、慰霊碑に捧げるお花が与えられ、それから、WFCの他のメンバーの近くに席を見つけました。運悪く、太陽が式典中に樹木限界線の上に昇り、長い式典の間に私達に直射日光が当たりました。そのため、とても暑かったです。私達の座席から式典の様子はあまりよく見えませんでした。いくつかのスピーチにはいまだにすごく感動し、直接参加できたということが嬉しいです。



一度、ワールド・フレンドシップ・センターに帰り、短いフィルム“原爆の爪痕”を観て、米吉喜代子さんの被爆者証言を聴きました。



集合写真 藤井さん（前列左）、米吉さん（前列中央）と

午後、私達は平和公園の供養塔に集合しました。そこではたくさんのスピーチとピース・クワイアによる歌を聴きました。私のスピーチをした以外は、木陰にいたので、実際にはむしろ涼しく、リラックスしていました。

そこでの儀式のあと、バーバラの記念碑に移動し、そこで他の短い儀式を行いました。もう一度、私は短いスピーチを行いました。そして私達はいくつかの歌を歌いました。この後、川に流す灯籠に平和への願いを書いて組み立てました。



私達が川に着くまでに、外は暗くなり始めていました。川に浮かぶ灯籠は、ものすごく美しく、写真ではその本当の美しさを見せることはできません。けれども、私の灯籠を水に浮かべた時、それは傾いたかと思うと転覆してしまいました。私がそれを引き戻しまっすぐな状態にするには、未だ十分近くに存在していました。でも、ローソクが消えてしまいました。2度目、灯籠は解き放され、再びひっくり返る前には少し遠くにあり、水の下に押し流されてしまいました。けれども、これに関して孝さんは、素晴らしい見方をしました—多分私の灯籠は、実際に海に到達するでしょう、というのは、それは他の灯籠みたいに引き上げられないから。



演劇

8月6日の直後には、生活は大分静かになりました。8月7日、天野達志さんが『父と暮らせば』の一人芝居を演じるためにWFCに来ました。それは非常にジーンとさせられ、天野さんは、観客に彼が娘なのか、父なのか常にはわかるように、2人の特徴をたやすく切り替えることができました。演劇自体は、彼女と親しかった多くの人達が原爆によって殺されたあと、生き残った者としての罪悪感のようなものを処理しなければならない娘についての話でした。

8月10日、“広島の子孫たち”と呼ばれる別の公演を観ました。田城美怜さんや彼女の子供たちがその中で演じ、彼らは素晴らしい役割を果たしました。演劇そのものは、多数の被爆者の話を語り、演技者は数世代にも及びました。

宮島

8月9日、美喜子さん、バーブ、そして私は、ついに宮島に抜け出すことができました。私達はしばらくの間、出かけようとは思っていましたが、私の全訪問の間は非常に暑かったので後まわしにしていました。その日は、なお暑かったのですが、有り難いことに、時折曇りでした。私達は、弥山の頂上近くまでケーブルカーに乗り、それから残り道を登り展望台でおにぎりを食べました。そこからの景色は、周りの多くの島々を見渡せる壮観な眺めでした。



アイスクリームへの思いが、私達にケーブルカーへの長い徒歩道を帰り続けさせました。その時まで、太陽は十分雲間から現れていましたので、とても暑かったです。ケーブルカーを降りたあと、大聖院への私達独自の道を見つけました。大聖院では、多くの帽子をかぶったユニークなお地蔵さんたちを見ました。88か所の各々のお寺からのお砂ふみをして、巡礼旅もしました。そして、お寺への石段近くで、1匹の猿をみました。



その他の宮島の写真



サル 写真中央





おわりに

私はこの夏、ワールド・フレンドシップ・センターで、このようなすばらしい広島での経験をしました。皆さんに再びお会いすることが出来、多くの新しい人々にもお会いできたことは素晴らしかったです。平和と広島と長崎の原爆投下による影響について私が学んだことを広めるのに、この話を私の本国での家族や友人に持ち帰ることでうきうきしています。私は、再び訪れてワールド・フレンドシップ・センターと共に働き続けることを本当に望んでいます。私の滞在中に非常に多くの友達ができました。そして、本当に皆様方と連絡を取り続けることを望んでいます。この機会を、本当にありがとうございました。

翻訳者：清水美喜子、山根美智子

皆様こんにちは。ケリー・パーカーです。

今日、皆様の前でお話ができることはとても光栄です。

バーバラ・レイノルズは私のひいおばあさんですが、私が生まれる前に亡くなったので、一度も会ったことはありません。

3年前、ワールド・フレンドシップ・センターの50周年記念行事があり、それに出席するために、私は家族と共に初めて広島に来ました。

私のひいおばあさんは、ワールド・フレンドシップ・センターを創設しました。でも、この広島を訪れるまでは、彼女のことや彼女の平和に関する努力などは、あまり知りませんでした。

その時、私達家族は2週間だけ広島に滞在したのですが、その2週間は、私の人生を大きく変えるきっかけとなりました。

被爆者のお話を聞いた時には、核兵器の恐ろしさに気が付きました – そして二度とそれを使ってはならないと思いました。

アメリカに帰ってから、私は広島に戻ってきて、平和への願いと核軍縮のためのメッセージを広げるお手伝いしたいとずっと思っていました。

やっとこの夏、私はボランティアとして6週間、ワールド・フレンドシップ・センターに戻って来るチャンスを得ました。

これは、私のひいおばあさんについてと、平和教育について、もっと学ばせていただけるいいチャンスなのです。

ワールド・フレンドシップ・センターは、彼女の将来を見据えた展望、平和擁護、そして被爆者とその体験談の認識を広めることを53年間も続けてきております。

私のひいおばあさんや、平和への究極目標を広める努力をなさっている人たちは、毎日私に希望を抱かせてくださっています。

非常に多くの暴力行為は、それが引き起こす影響を全く知らない人々によって引き起こされるのだと、私は信じています。

ひいおばあさんは、被爆者のお話やスケッチを通して、罪の意識を引き起こさせようという意図ではなく、戦争の現実をみてもらおうと、核兵器や放射能の起こす悲劇を、人々に理解させることに尽くしてきました。

多くの人々が、平等と共感というレンズを通して、戦争や核兵器の起こした無残な出来事を見れば、世界は、もっと平和になれるでしょう。

バーバラ・レイノルズの残した夢は生き続け、私の生き方を変えたように、変化し続けるでしょう。

今日のこの行事にお出かけくださって、本当にありがとうございました。

翻訳者：清水美喜子



アメリカPAX報告

三村 庸子

6月末の公募を見て応募しました。メンバーに選んで頂いてこの度参加できたことは私にとって得がたい貴重な経験となりました。アメリカでは4ヶ所訪れましたが個人旅行では到底成しえなかった、たくさんの方とお会いすることが出来、また沢山の場所を訪問できました。これはひとえにWFCがそれぞれの機関と培ってきた歴史のおかげだと痛感しました。行く先々で暖かく迎えていただき、コミュニティの結びつきの強さを感じました。また、綿密な準備に力を注いでくれたそれぞれの地でのオーガナイザーの方達、WFCのPAXコミティーの方達のおかげだと感謝しています。

1番初めに訪れたのはシカゴから西北に位置するElginでした。ダンさんに依るとここはブレズレン（平和主義の教会の1つ）の本部で、かつてはブレズレンの出版業務部門として発展しました。こちらではシー・カウボーイの本も出版しました。今では、多くの業務のうちここで数週間のトレーニングをへてボランティアを国内・国外に送りだしています。

現在の館長夫妻はこちらのBVS（ブレズレン・ボランティア・サービス）を経て広島のWFCに来られました。

イリノイ・ウェズレียน大学では昨年6月にインターンとしてWFCに8週間いた ジョージがリーディング・オーガナイザーを務める大学の国際平和デーに参加しました。9月21日の国際平和デーに合わせて国際平和カンファランスデーを20日から22日まで開催しており、私たちは初日から7つのクラスビジットをしました。クラスでは自己紹介のあと質疑応答があり、クラスや学生の考えを知るいい機会にはなりました。この大学ではヒロシマについてよく学んでいるという手ごたえがありました。質問の内容は、ネイティブでない私にとってその場ですぐ返せるものばかりではなく、質問がクラスビジットで有ることを認識していれば、ある程度想定して考えをまとめておきスムーズに話が出来たと反省しています。満足のいく答えを返せなかったという思い、力不足を痛切に感じました。

私のプレゼンの内容はWFCの紹介と自分のピースガイドを通し、無辜の市民（夫の身内も含め）が原爆被害を受けた話をしました。6時半から、パネルとディナーという形で、私のはハंक・キャンベル氏でパレスチナとイスラエルの青少年をアメリカでのキャンプを通して多様性を学んでもらうという活動とか地域のロータリー・クラブでも活躍している方で 私の緊張は高まるばかりでした。でも一番前の席にPAXメンバー3人が座ってここにいるからねと言ってくれたのは、不安を拭い去るに十分効果がありました。この場面だけでなく道中冗談を言い合ったり何かと助け合ったりありがたい仲間でした。

ウィルミントン大学ではまずピースリソースセンターを訪れタニヤさんにお会いし、そこで地域の方の心のこもった美味しいポットラックパーティーを楽しみました。ここでは地域と大学がとても近い感じでした。ここには日本語の核に関する書籍が日本以外では最多の700冊あるそうです。バーバラ・レイノルズの記録資料の整理と分類がタニヤさんと学生の手で進んでいます。

ブラフトンではオーガナイザーのアリス・ラムザイヤーさんの家にまずお邪魔し、ホームステイ先の家族と会いました。ブラフトン大学ではディレクターのルイズさんに構内の彫刻を案内していただき平和への発信を芸術と文学を通してする強い意志が感じられました。小学生から、平和について学ぶ居心地のいい、本を揃えた部屋があり“さだこ”を伝えていました。プレゼンは3人続けてLion & Lamb平和芸術センターでありブラフトン新聞でアリスさんが宣伝してくれていたのもコミュニティの人たちが多かったようです。私のステイ先のスティーブさん（当大学の数学教授）や学生もいました。後で各自、話が弾み楽しかったです。

この旅でPAXが訪ねた4つのコミュニティは、年月をかけて“ヒロシマ”を伝えて“核兵器が人類の未来を危うくするもの”と理解を進めているところでした。いまだアメリカでは核保有国として自国の立場を主張し是認する意見が強いようですが、ほんの小さい私達の力でもつながることで大きな1つの意見となると思います。

この思いを強くもって歩んでいこうと思いました。機会を与えていただきありがとうございました。



The Lion and Lamb Peace Arts Center in Bluffton University

アメリカPAX 2018

天野 達志

この度、PAX-USA 2018 に参加させていただきました。

今年4月、WFCの山根理事長より、「『父と暮せば』の一人芝居をアメリカでやってみないか」とのお声がけを頂いたのが始まりでした。英語字幕付きの公演を、既に館長ご夫妻をはじめ、WFCの方々にも観て頂いていましたので、是非やらせて頂きたいとの思いでお受けしました。日本の代表的な劇作家、井上ひさしが描いた、広島原爆をテーマにしたこの物語を、アメリカの地で上演するという、大変貴重な機会を頂きました。「英語力の殆ど無い私が、果たして務まるのだろうか」という心配はありましたが、PAXメンバー

（三村さん、西井さん、田城さん）の強力なサポートのおかげで、4会場でのパフォーマンスを全て大成功で終えることが出来ました。お力添えを頂いた皆様に心より感謝申し上げます。

ツアーでは、どの地でも、出会う方々みなさんに暖かく迎え入れて頂き、多くの方々のご支援を頂きました。イリノイ州エルジンブレザレン教会での公演（9/19）では、ダンさんが、本番ぎりぎりまで、機器の調整に奔走して下さいました。ブルーミントンのウェスレアン大学（9/20）では、ジョシーさんが中心者となって動かれ、大学の先生にも通訳でお世話になりました。会場が、笑いと涙に包まれ、スタンディングオベーションを頂きました。ご来場のレイモンド・G・ウイルソン氏と昭子さん御夫妻から、被爆後の広島のパノラマ写真を3部頂きました（写真は後日、デイトン国際平和美術館とアリス・ラムセイヤーさん、WFCにお届けしました）。オハイオ州ウィルミントン大学（9/25）では、ピース・リソース・センターのタニヤさんに、脚立に登って、会場の照明をセットして頂くなど、大変お世話になりました。宿泊させて頂いたスナイダー氏ご夫妻や地域の皆さん、大勢の学生さんが観に来られました。ブラフトンのファースト・メノナイト教会（9/27）でも、地域コミュニティーの皆様が大勢いらっしゃいました。バーブさんの弟・ケンさんも来られました。89歳の誕生日を迎えられたアリスさんは、益々お元気で、私たちに細やかなお気遣いをして頂き、大変お世話になりました。

今回のツアーを振り返り、行く先々で出会った人たち、案内をして頂いた方々、暖かく迎え入れてくださったホストファミリーの皆さん、会場に足を運んでくださった方々、PAXメンバーの一人ひとりに、改めて感謝申し上げます。そして、このような貴重な機会を授けて頂いたWFCの皆様、重ねて御礼申し上げます。ありがとうございました。

今回のツアーでの体験を、平和のメッセージを伝える公演活動に活かして参ります。広島と長崎に落とされた原爆の実相や、WFCを創られたバーバラ・レイノルズさんはじめ、核廃絶・世界平和に取り組んだ方々の歴史をさらに学び、伝えて参ります。今後とも宜しくお願い致します。

ありがとうございました。

「PAX アメリカツアーを終えて —真のボランティア精神から伝えられる平和—」

西井 美穂

私はPAX（Peace Ambassador Exchange、平和大使交換プログラム）のメンバー4人の一人として、2018年9月17日アメリカへ渡りました。

私の参加したPAXアメリカツアーは、9月17日から28日までのシカゴを中心とする12日間、4か所に数日間滞在しながらぐるっと一回りしてシカゴに戻り帰国するという行程でした。ぎゅっと凝縮され密度の濃い旅であろうと、これまでのPAXツアーに参加した諸先輩方から聞いておりました。参加前から様々な配慮をいただいていたこのツアーは、学び萬斎の楽しい旅であることは予想されましたが、体力の面で少し不安がありました。実際には、その不安も杞憂に終わり、最初から最後まで幸せな持ちで過ごすことができたのは、一緒に行ったPAXメンバーの仲間と日米のボランティア精神にあふれた人たちの連携プレーのおかげだと思っています。

このPAXツアーでの私の最大の学びの一つは、アメリカでは、家庭が一つの明確な社会の単位で、一人ひとりが社会に開かれているということを肌で感じることもできたということでした。今回は平和のために活動している人たちとの出会いが中心だったので、そう感じたのかもしれませんが、しかし、積極的に他者のために働くための確固とした土台・組織があり、そこで働く人は楽しみながら責任をもって活動しているという様子を見るにつけボランティア精神が社会や個人に根差しているということを感じました。他者のために働くことは自己犠牲ではなく、むしろ自己の価値とつながっていることに感動しました。

さて、PAXメンバーとしての私のプレゼンテーションですが、出発直前日本で確認できたことは、12日間で自己紹介なども含めて少なくとも12回行うということでした。シカゴ周辺のElginのChurch of the Brethrenで2回、bloomington・NormalのIllinois Wesleyan Universityで7回、Wilmington Collegeでは2回、Bluffton UniversityのLion and Lamb Peace Arts Centerでは1回。

すべてのプレゼンテーションは、たとえ拙いものであったにしろ、私にはかけがえのない時間でした。しかしその中でも最も緊張し、かつ不安をおぼえ、また感動を覚えたプレゼンは、Illinois Wesleyan Universityでの日程の最後の日に行われた、Panel Discussionでした。私を除くパネリスト3人は、アフリカや中東出身の難民として生き抜いた人や、平和活動家などアメリカ在住の人たちでした。体験においても、英語力という意味でも、

相当私とはかけ離れていると初めからわかっていました。それでも私は、自分のテーマである“The Spirit of the Memorial Cenotaph for Atomic Bomb Victims（原爆慰霊碑の精神）”は、根底において彼らの平和活動の精神とつながっていると信じていました。

Panelの終了する約30分前のことです。会場後方から、一人の中国の方が私に対して厳しい指摘をされました。日本人の南京大虐殺について数字をあげて糾弾するという雰囲気もありました。私はその時、過去の日本人の行為について謝罪するとともに、戦争には勝者も敗者もないこと、原爆慰霊碑は、人類の一員として戦争に加担したことを反省し、死者の前で戦争を絶対にしないことを誓うためにあると述べました。被爆者の場合は、原爆の被害者でありながら世界的な視点からは加害者であり、未来の平和のためには、被爆者を含む全人類が恨みや被害者意識を乗り越え、世界平和を誓うことが必要であることなどを、浜井信三元広島市長の自伝である『原爆市長』から引用しながら説明しました。自分の言いたいことが伝わったかどうか疑問でしたが、会場から拍手が聞こえたのでほっとしたのを覚えています。

WFC広島やアメリカの皆さまには、こうした機会を与えていただきありがたく感謝の気持ちでいっぱいです。英語能力の向上は、私の今後の課題としたいと思っています。

「アメリカPAXツアー」を振り返って

平和の基礎となるもの

田城 美怜

12日間のアメリカPAXツアーは、私にとって「きっかけ」の旅となりました。日々の体験や気づきから、外からの視点でヒロシマを見るきっかけ、大きな意味で「平和」を考えるきっかけ、そして自分を再確認するきっかけを得られました。

シカゴ大学の最初の核実験施設跡地にある記念モニュメントや国立アメリカ空軍博物館の展示を通して、核開発の始まりが現在も称賛されている文化を目の当たりにしました。ウェスリアン大学で中国人男性から第二次世界大戦中に日本軍がアジア諸国に行ってきたことへの指摘もありました。それぞれのストーリーがあり、歴史的解釈がある中、どうしたら未来に目を向けて話し合い、平和に向かって共に歩んでいけるのか。私たちの世代はこれからヒロシマをどう伝えるべきなのか。

ウェスリアン大学でのピースカンファレンスを通しては、紛争、歴史を遡る憎み合い、格差社会、男女差別など、世界中でそれぞれの「平和」を必要としている人たちの現状とそれらの状況を改善するための活動について学びました。「平和」とはなんなのだろう。一人一人にとっての平和は違うのか。共通するところはなんなのだろう。

私の中で答えは定かになっていない疑問ばかりですが、このようなことを考え、持ち帰ることができました。それらを心に留めながら、さらに学ぶ中で、その答えを少しずつ探っていきたいと思っています。

具体的な気づきとしては大きく二つあります。

一つめは、大学で何度か行ったクラス訪問です。そこでは、一方的プレゼンではなく、質疑応答などの対話が主でした。そこには能動的で直接的な人との繋がりがあり、とても有意義だと感じました。

二つめは、アートの力です。私のプレゼンでは「ヒロシマの孫たち」について少し紹介しました。そして天野さんの「父と暮せば」のひとり読み語りしばい。ヒロシマを伝える効果的な一つの手段として、アートには特別な力があると再確認しました。人間として、心が自然と共感したり、動かされたりする力に人種や国籍などは関係ありませんでした。

これらの気づきをこれから活かしていきたいと思います。今回は大学生より上の人に話すことが主でしたが、次回はもう少し広い世代に、歴史、証言、アートを含め、様々な方法を通してヒロシマを伝え、私たち一人一人が核問題を自らが直面している人類の課題として捉えていくことにつながってほしいと考えます。

毎日が新しいプレゼントを開けるかのような毎日でした。私が赤ん坊の頃に知っていたのよ、という女性との驚きの嬉しい再会が2回もありました。たくさんの人にお世話になり、様々な出会いの中で改めて感じたことがあります。それは、対話による学び、理解、繋がりが。すなわち友達になること。やはり平和の土台はそこにあるのかなと強く思いました。

ブレズレン・ボランティアサービスのダンと妻のウェンディ。あなたたちの溢れる寛容さに感謝します。夜の会話の中では、新しい視点をたくさんもらいました。ベーグルから始まり、ベーコン、そして最高のコーヒー。私の小さなアメリカンドリームを叶えてくれました。二人のおかげで私たちの旅は素晴らしいスタートを切ることができました。

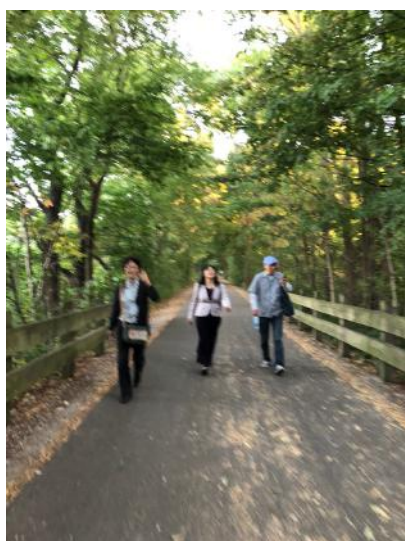
イリノイ・ウェスリアン大学のジョージー。意義深いピースカンファレンス、そしてそこから生まれたかけがえのない繋がりをありがとう。色々な気づき、そして学ぶことの幸せ、

大切さを改めて感じることができました。あなたと、人として、女性として直面する様々な問題を語り合えた時間は本当に楽しかった。

ウィルミントン大学のタニア。短い時間の間にコミュニティー、アート、博物館と、信じられないくらい多方面から平和を考え、経験させてくれてありがとう。あなたの穏やかでありながら、静かに燃え続ける強さが私は大好きです。そして今までアメリカで食べた中で一番美味しかったかもしれない食事をありがとう。

歴史をもう一度学び直し、それを通して現在を考える必要性を気づかせてくれたスナイダー夫妻にも感謝しています。手作りデザート、そしてベーコンをたくさんありがとう。

ブラフトンのアリス。何年ぶりかわからないくらい長い年月を挟みやっと再会でき、あなたの89歳のお誕生日も一緒に過ごせて、本当に嬉しかった。私が小さかった頃から、今も変わらず、愛情を注いでくれてありがとう。そんなあなたの周りには愛情によって築かれたコミュニティーがあり、平和の根底にあるべきものを垣間見たような気がします。



共に旅をしてくださったPAXメンバーの方たち。それぞれの個性でお互いを支え合いながら過ごした掛け替えのない時間と、たくさんの笑いをありがとうございました。

そして最後に、いつも見守ってくださり、今回私にこの素晴らしい機会を与えてくださったWFCの皆さんに心からの感謝を送ります。

写真：写真がボケているのが残念ですが、私の楽しい旅仲間3人。大合唱しながらお散歩していました！

発行者特定非営利活動法人ワールド・フрендシップ・センター

発行所〒733-0032 広島市西区東観音町8-10

(C)NPO World Friendship Center 2018

無断転載、複製を禁ず